

ウォーキング

初秋の風に吹かれながら、志木市の新河岸川沿いを中心に、河川の歴史、水害に対する先人の知恵、現代の治水技術を体感しました。

日	時	: 10/20(土) 10:10~12:10
天	候	: 晴れ
参加者数	:	101名

<ウォーキングの様子>

①宗岡閘門跡



近代改修により水位が下がった新河岸川で舟を通すために昭和4年に新設された施設です。中洲には、かつての閘門の一部であるコンクリートの残骸が残っています。

②郷土排水機



低地である宗岡地区のせせらぎの小径を中心とした約160haの地域に降った雨水を3基のポンプ(毎秒4.7トン)により新河岸川に放流する施設です。総合治水対策の一環として造られました。

③沿川の堤防・水塚・水田



江戸、昭和、平成のそれぞれの時代に造られた3つの堤防を同時に見ることができます。治水の歴史を知る上で重要な資源・空間です。近くにはかつて水害時の避難場所となった水塚があります。

④新河岸川水位観測所



水位観測所のデータを見ると、新河岸川が1日に2回、潮の満ち引きにより大きく水位変動するのがわかります。水位の差は平常時で50cmくらいあります。

⑤いろは樋の大柁



当初は橋のように樋が川に架けられていました。明治31年頃、川の底を通過して対岸に水を送る(伏越)方式に変更され、その時に造られた煉瓦作りの大柁です。

⑥いろは樋の模型



江戸時代、樋は木製で造られており、野火止用水から対岸の宗岡地区に水が引かれていました。当時の様子がうかがえるミニチュアと原寸大の樋の模型が展示されています。

⑦味場排水機場



中野下住宅一体の雨水を集め、大雨時に河川へ放流する施設です。2基のポンプで毎秒約2トンの能力があります。

新河岸川と柳瀬川の比較



合流点付近の様子です。平常時において、柳瀬川は新河岸川の約2倍の流量があり、その6割以上は下水処理水です。

⑧改修碑・野火止用水の樋管



かつては新河岸川は朝霞で荒川に合流していました。明治43年の大洪水を機に、隅田川につなぐ大改修が行われました。

⑨北美塚樋



江戸時代は木造でしたが、明治30年頃に煉瓦作りに改造された樋管のひとつです。志木市内にある煉瓦造りの塚樋は、各々デザインが違うのが特徴的です。

⑩大小合併門樋



2つの塚樋を合体させて1つの樋管としたものです。現在、志木市のほか、東上線沿線の地域に煉瓦造りの構造物が多く残されています。

⑪志木市立宗岡中学校



校庭を外周部の地面から40cm程度下げ、降った雨を校庭にためることができるようになっています。「校庭貯留」という総合治水対策の1つです。(貯留量1,650m²)